

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K21255

研究課題名（和文）看護職者における産後の復職時期と就労継続・精神的健康との関連についての縦断的研究

研究課題名（英文）Longitudinal study on the relationship between postpartum return to work and continuation of employment and mental health among nurses

研究代表者

大野 真実 (Ono, Mami)

東京大学・大学院医学系研究科（医学部）・客員研究員

研究者番号：70635896

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本における労働力人口総数が減少対する中で女性労働者の就労継続支援が進められている。本研究では、女性の代表的な職業のひとつである看護職者の妊娠時から復職やその後の就労継続までの各時期に着目しながら、復職の意思や就労継続を支える内容を明らかにすることを目的とした。総合病院において妊娠・出産を挟み、退職することなく就労継続している看護師・助産師を対象とした面接調査において、家族や職場といった周囲からの支え、経済的問題が勤務継続の後押しをしていた。また、休日や夜勤前の過ごし方について効率の良い生活の工夫を身につけていき、子育ての仕事の両立による心身の負担を和らげていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本において同一の職場における就労の継続は、昇給の問題や再雇用の問題と関係が深い。特に今回調査対象となった看護職者の場合、地域における代表的な総合病院に勤務することで、安定した給与と育児支援を得ながら自らのキャリア形成の実現が出来る環境にあった。従って、看護職者の就労継続には看護職としてのキャリア形成が実現できる職場、安定した給与と子育てを支える職場、家族の協力を通して、看護職者自身が仕事と子育てと自分の休息時間を得られるような日々を身につけていることが明らかになった。しかし、そうした中でも交代制勤務には家族の協力が必要であり、一人親や協力者が不在の場合の就労継続の難しさも示唆された。

研究成果の概要（英文）：While the total number of labor force in Japan is decreasing, support for continued employment of female workers is being promoted. In this research, we will clarify the content that supports the intention of returning to work and the continuation of employment, focusing on each period from the time of pregnancy to return to work and the continuation of employment, which is one of the typical occupations of women. In an interview survey of nurses and midwives who continue to work without retiring after having a pregnancy or childbirth at a general hospital, support from the surroundings such as family and workplace, financial problems helped to continue working.

In addition, they learned how to spend an efficient life on holidays and before night shifts, and alleviated the mental and physical burden of balancing child rearing work.

研究分野：看護学

キーワード：母性・女性看護学 看護管理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

労働力人口総数の減少が進む日本では、女性労働者の就労継続支援のひとつとして、離職の最大の原因である、仕事と子育ての両立を支えることが進められている。代表的なものとしては、産前産後休業（以下、産休）および育児休業（以下、育休）の取得のほか、「ワーク・ライフ・バランス推進事業」があげられる。しかし、看護職者の場合、児の健康状態や、成長・発達への心配、育児への自信のなさという問題に、日々進歩する高度医療への対応の不安が重なり、継続した就労が困難になるという報告がある（谷脇；2011，藤沢；2015，丸山；2012）。また、看護職者は他の職種に比べて仕事の負荷が大きく、自らの感情を調整しながら労働する職業である（中島；2005，片山；2010）ことから、看護職者の復職と就労継続には特有の理由があることが考えられる。

したがって、看護職者が仕事と子育てを両立させていくためには、単に復職するだけでなく、その後も就労を継続できるような支援体制の構築が必要だと考える。しかし、これまで看護職者の妊娠時から復職・その後の就労継続までの各時期に着目しながら、復職の意思や、就労の継続を支えている内容を明らかにした報告は少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、出産後の看護師・助産師（以下、看護職者）における仕事と子育ての両立のための、復職時期にあわせた支援プログラム構築に向けた基礎資料を得ることである。

3. 研究の方法

看護職者を対象とした面接調査と質問紙調査、およびアクチグラフィを用いた睡眠と覚醒リズムについての調査を実施する。

面接調査および質問紙調査の対象者は、妊娠・出産前から同一病院に勤務しており、一度も退職せず就労継続していること、常勤採用者であり、交代制勤務をしている看護職者を条件とした。

更に、アクチグラフィを用いた調査の対象者の条件として、妊娠後期（産前6週以降）、産後半年、復職後1か月前、復職1か月後の測定に協力が得られる者とした。

4. 研究成果

女性就労者の産後の復職と健康状態に関する国内外の文献レビューを実施した。また、総合病院に勤務する女性の復職と子育て支援の取り組みについてフィールドワークと看護管理者へのインタビューを実施した。この結果を参考に、の面接調査におけるインタビューガイドを作成した。1都道府県にある300床以上の総合病院3施設から、0歳から15歳までの子どもがいる看護師・助産師計12名に対してインタビュー調査を実施し、妊娠前から出産、復職と現在に至るまでの仕事と子育ての両立を支えた内容についての経験を語ってもらった。面接調査は平均時間52分20秒、助産師は3名、管理者は2名含まれていた。結果についてはMAXQDA12を使用して分析し、面接調査の協力を得た施設以外に所属する都道府県の総合病院に勤務する看護管理者からスーパーヴァイスを受けて内容を修正した。

面接調査の結果、看護職者は妊娠や出産を経験する中で、看護職者としての自身の生き方を模索していた。目指した職業に就いていること、仕事をしていることが当たり前という価値観や、現在の職場で働いていることへの誇りが「仕事のやりがい」に繋がっていたが、子どもを妊娠出産する中で「変化する生活への想像」をし、実際に子育て中に停滞する看護職のキャリアへの焦りや、子どもとずっと一緒にいることの負担を感じていた。しかし、家族や職場といった「周囲からの理解と支え」、収入のために働くことや、地域を代表する病院ならではの充実した福利厚生を得るといった現実的な「経済的問題」が勤務継続の後押しをしていた。そして継続した勤務を通して変わっていく周囲の子育てと仕事の両立に気づくことや、両立する中で分かる子育ての大変さ、助けてもらった経験を次につなげるという「次世代の勤務継続の協力者」に自らなることに繋がっていた。

仕事と子育ての両立における心身的な負担の軽減には、休日や夜勤前の過ごし方について効率の良い生活の工夫を、時間をかけて徐々に身につけていくことがあげられた。仕事と子育ての両立をしていくうちに、残業時間を減らす工夫や、自分自身を労わり、楽しみをみつける工夫をしながら、自らの日々の時間調整力が向上していくことを実感していた。日本において同一の職場における就労の継続は、昇給の問題や再雇用の問題と関係が深い。特に今回調査対象となった看護職者の場合、地域における代表的な総合病院に勤務することで、安定した給与と育児支援を得ながら自らのキャリア形成の実現が出来る環境にあった。従って、看護職者の就労継続には看護職としてのキャリア形成が実現できる職場、安定した給与と子育てを支える職場、家族の協力を通して、看護職者自身が仕事と子育てと自分の休息時間を得られるような日々を身に着けていることが明らかになった。しかし、そうした中でも交代制勤務には家族の協力が必要であり、一人親や協力者が不在の場合の就労継続の難しさも示唆された。

アクチグラフィを用いた睡眠と覚醒リズムについての調査は、予備調査として妊娠中の女性2名に協力を得て実施し、装着方法についての検討を行った。平成27年度にライフレコーダーFS-760を用いて実施したが、睡眠中の腹部装着の違和感や、上腕装着による臨床での感染予防的な問題があること、協力施設との調整の難航から今研究期間では実施が困難であり、装着や使用器具への再検討の必要が示唆された。

これら結果から質問紙調査を作成し、妊娠出産と同一職場での継続勤務経験のある看護職者を対象に内容妥当性について検討したが、今回の研究期間内で調査はできなかつたため、今後実施予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大野真実
2. 発表標題 総合病院に勤務する看護職者が妊娠出産後も勤務の継続を実現させる過程
3. 学会等名 第30回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----